

『歎異抄』ワールドによるマナゾ

浄土真宗本願寺派総合研究所

現代は、価値観が多様化し、さまざまな情報が飛び交い、「何が真実であるか」が見失われがちな時代と言えます。また、人間関係に疲れ生きづらさを抱え、「孤独」がキーワードともなっています。そんな時代に、特に若い人たちにぜひ読んでもらいたいのが、この『歎異抄』です。

『歎異抄』は、親鸞しんらん聖人の弟子であった唯円ゆいえんが聞き覚えていた聖人のお言葉を語録として書きとどめたものです。そこに記される、感性豊かな若き唯円ならではの切実な苦悩に対しての親鸞聖人の生なまの言葉が、同じように苦悩を抱える現代の若い人たちにも、必ずや響いてくると思います。

原文(古文)の力強さにふれるとともに、その劇的な内容が伝わるようにとの意図で、おもいつきり「現代語訳」してくださった井上見淳先生の「劇場型」ともいえる訳を通して、その臨場感を味わってください。そして、一ノ瀬かおる先生によるユニークで繊細なイラスト。さらには、学習の一助ともなるように、いろんな資料も添えました。各条のPointは当研究所の満井秀城が担当しています。『歎異抄』の魅力が、この一冊に集約されています。

さあ、どうぞ、どこからでもお読みください。



目次

『歎異抄』ワールドにようこそ	1
プロローグ	5
『歎異抄』のあらまし	6
『歎異抄』に魅了された人たち	10
『歎異抄』の登場人仏	14
読んでみよう『歎異抄』 (前序・師訓篇・後序)	16
親鸞さまってどんな人?	82
唯円さんってどんな人?	92
エピローグ	99



プロローグ



若先生 なるほどそういうこととか。でも、『歎異抄』に興味をもつなんて、珍しいね。だいたいみんな、「ぶーん」で終わっちゃうからね。

あ「って思ってる自分がいて

みよつか。
カオリ うん。ありがとう、若先生。

カオリ 実は、このあいだ学校の授業で、親鸞さまや『歎異抄』っていう本が出てきたんだけどね、教科書の説明だけではよくわからなくてさ。『歎異抄』って浄土真宗の本でしょ。だから、若先生に詳しく教えてもらおうと思ってきたの。

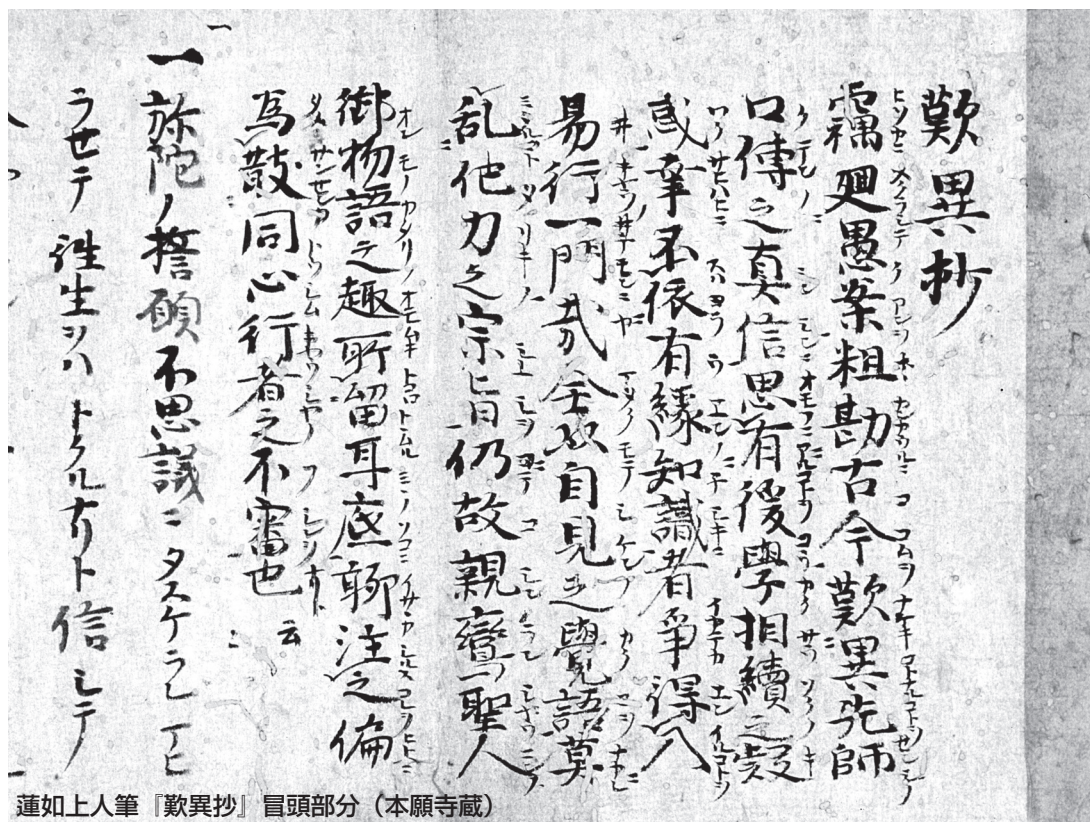
若先生 うん、うん。
カオリ でも、本当はそうじゃないもん。だって、同じくラブの友達が全国大会に出たときも、嫉妬して素直に喜ばなかつたし。この間も、親友から彼氏のことを相談されて、ふんぶんって聞いてあげるんだけど、どこか「つぎいな

カオリ そうなの。それで『歎異抄』の「悪人が救われる」っていう言葉がなんとなく気になったの。
若先生 カオリちゃん。「歎異抄」という書物を読むとね、僕はいつも、自分では気づけなかつたようなものの方や、忘れていた大切なことを思いださせてもらってね、楽になる気がするんだよね。じゃあ、せっかくだし、この本について紹介しよう。一緒に読んでみよつか。

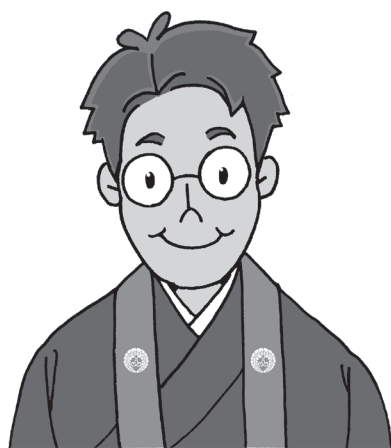
カオリ 若先生、こんにちは！
若先生 おおー、カオリちゃん。久しぶりー！ どのかしら？

(笑) わたし、教科書に「悪人が救われる」と書かれてあって、なんか気になったの……。最近ちょっと自己嫌悪というか、モヤモヤしてるから。

……。
若先生 そっか、最近、自分の中でいろいろあったんだね。そっいつ時あるよね。

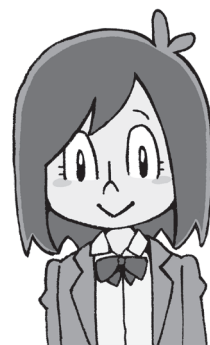


蓮如上人筆『歎異抄』冒頭部分(本願寺蔵)



若先生

浄土真宗の僧侶で、地域の子もたちのお兄さんの存在。月に1回、お寺の「日曜学校」を続けていて、「若先生」と呼ばれている。



カオリ

小さい頃からお寺に遊びにきている高校生。授業で『歎異抄』を知り、もっと知りたくなった。

『歎異抄』のあらまし



『歎異抄』は教科書にも登場する有名な書物です。でも、名前は知っているけど、どんな書物かわからない人は多いんじゃないかな。『歎異抄』を書いたのは親鸞さまだと思っていた人、いますよね？ 実は私も…。そこでまずは、基本的な内容について、若先生に質問をしてみました。『歎異抄』のあらましをさくっとおさえちゃいましょう！

Q. 『歎異抄』を書いたのは誰なの？

A. 『歎異抄』の著者は、実のところ謎なんだ。なぜなら『歎異抄』には著者名が記されていないから。だから、誰が書いたのかを確定することは困難なんだよね。

著者について昔は、親鸞さまの孫の如信さま（1235～1300）や、ひ孫の覚如さま（1270～1351）という方々の名前が挙がっていたけど、現在は、常陸の河和田（現在の茨城県水戸市）というところに住んでいた、唯円（1222～1288頃）というお坊さんだと考えられている。唯円さんは親鸞さまのお弟子さんだよ。著者が唯円さんであるとされた理由はいくつもあるんだけど、その一つが、『歎異抄』の言葉遣いにある。『歎異抄』には、唯円さんが親鸞さま

の対話相手として2度（第九条と第十三条）登場するんだ。ここでの『歎異抄』の表現を文法的に詳しく見ていくと、著者は唯円さん以外に考えられない、ということになったんだ。唯円という方は、自身の信仰のあり方に悩み、遠く関東から危険な旅をして京都へのぼり、親鸞さまの教えを命をかけて求めた人なんだ。その唯円さんの心に響き、その人生を支えた親鸞さまの言葉を記したのが『歎異抄』なんだよ。その事実を思うとき、『歎異抄』の重みは、よりいっそう増すんではないかと、僕は思ってるんだ。



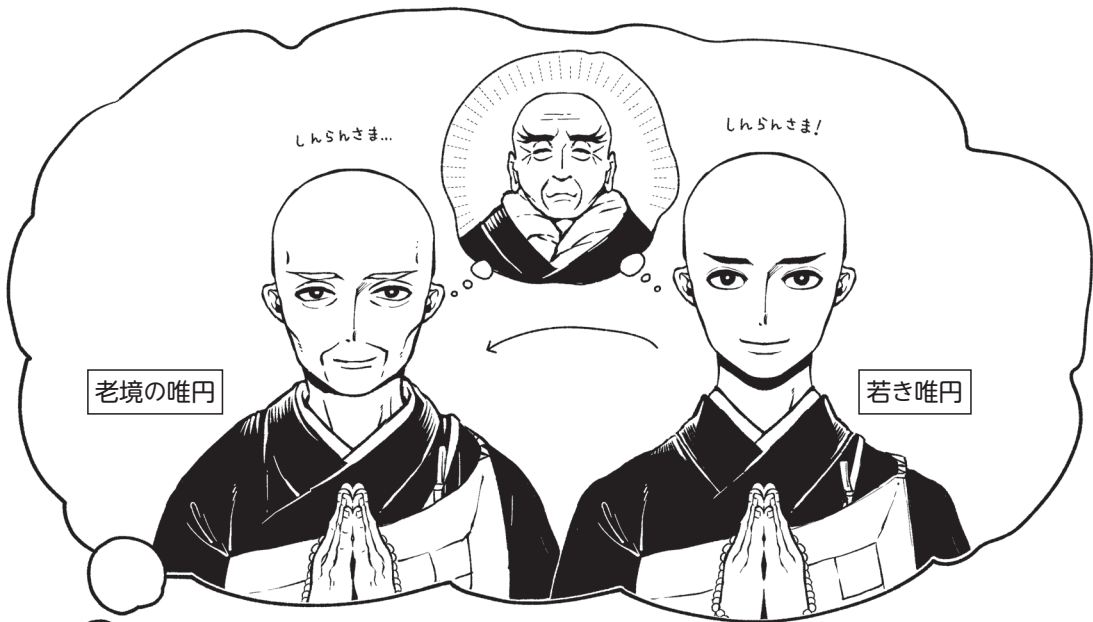
Q. 唯円さんが親鸞さまと出会ったのはいつなの？

A. 唯円さんは30代半ばまでには親鸞さまとお会いしていると考えられているんだ。2人の年齢差は49歳だから、そのころ親鸞さまは80歳を過ぎていらっしやったことになるね。かなりのご高齢だよ。

これから『歎異抄』を読んでいくにあたり、まず、まっすぐに教えを求め、若き唯円さんと、かつての自分を見るような眼差しで唯円さんに語りかける親鸞さまを思い浮かべてみてね。

Q. 唯円さんが『歎異抄』を書いたのはいつなの？

A. 唯円さんは『歎異抄』を書いている自分自身を、「枯れ草のような老いぼれたこの身（77頁）と表現しているから、『歎異抄』は約70年の生涯を生きた唯円さんの晩年の書と推定されるね。つまり唯円さんが親鸞さまに出会ってから30年という長い時間が経った頃、現状を歎き、若き頃の親鸞さまとのやりとりを思い出し、記されたのが『歎異抄』という書物なんだ。長い時間が経過しているのに、『歎異抄』には親鸞さまのたくさんの言葉がとても生き生きと記されていてね。『歎異抄』の言葉がいかに唯円さんの人生に大きなインパクトを与えたのが伝わってくるよ。



思い浮かべてみる...

